

視覚障害者をつくる

美術鑑賞ワークショップ in 恵比寿映像祭

第10回恵比寿映像祭では、メイン会場の東京都写真美術館のほか、隣接する恵比寿ガーデンプレイス センター広場や、日仏会館で展示作品をご覧いただけます。作品解説を行うガイドツアーとは別に、メイン会場の作品を、見えない人も見える人も一緒に鑑賞します。作品の見え方、感じ方を言葉にしなが、「見えていること」「見えていないこと」、あるいは情報の受け取り方の違いについてなどを参加者同士で話し合います。

〈視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップとは〉

障害の有無にかかわらず、多様な見方の人が集まり、言葉を交わしながら一緒に美術鑑賞をするワークショップです。さまざまな視点を持ち寄ることで、一人では出会えない新しい美術の楽しみを発見できるはず。誰もが気軽に美術館を訪れて、感じていることや印象、考えを自由に語り合う、そんな美術鑑賞のスタイルを目指しています。



第7回恵比寿映像祭「惑星で会いましょう」オフサイト展示ガイドツアーより 瀬田なつき (5windows eb) 2015年 撮影:新井孝明

会場:東京都写真美術館全フロアの数作品[120分/日本語]
日時:平成30年2月18日(日)15:00~17:00[2月12日(月)正午締切]
平成30年2月24日(土)11:30~13:30[2月18日(日)正午締切]
定員:各回14名
参加方法:メールにて事前申込制(申込多数の場合は抽選)
参加費:無料
お申し込み方法:右記の項目を記入の上、メールでお申し込み下さい。

お申し込み先: yebizo_ws@topmuseum.jp
1、参加希望日時
2、お名前(よみがな)
3、メールアドレス
4、障害の有無と種別
5、当日同行する介助者(ガイドヘルパー)の有無
6、盲導犬の有無
7、恵比寿駅までのお迎えが必要な方はその旨と連絡先

※ワークショップ申込情報に関するプライバシーポリシーは、公式ウェブサイトをご覧ください。

制作:第10回恵比寿映像祭、特定非営利活動法人アーツイニシアティヴトウキョウ[AIT/エイト]、視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ

恵比寿映像祭とは

2018年、恵比寿映像祭は第10回を迎えます。恵比寿映像祭は、平成21(2009)年の第1回以来、年に一度開催している映像とアートの国際フェスティバルです。展示、上映、ライブ・パフォーマンス、トーク・セッションなどを複合的に行い、今回で第10回を迎えます。ロゴのオープンなフレームとしてのカッコが象徴するように、映像をめぐるひとつではない答えを探りながら、映像分野の活性化を領域横断的にめざしてきました。これまでに参加した作家・ゲストは総勢840名以上におよびます。多くの作り手と受け手がフェスティバルに集うことで、映像表現やメディアの発展をいかに育み、継承していくかという課題について、広く共有するプラットフォームへと成長し続けています。

YEBIZO MEETSとは

恵比寿映像祭地域発信プロジェクト「YEBIZO MEETS」は、昨年から開催する東京・恵比寿という地域から発信するプログラムの総称です。昨年はその先駆けとして、恵比寿ガーデンプレイスのガラススクエア「COMMON EBISU」で、伊東建築塾から伊東豊雄氏、代官山アートフロントギャラリーから北川フラム氏のお二方によるスペシャルセッションや畠山直哉氏と映像祭出品作家マヌ・ルクシュ氏によるオーストリア大使館共催トーク、「ダンス保育園!!」などを開催いたしました。

恵比寿映像祭 お問い合わせ | Contact

東京都写真美術館 〒153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内 TEL:03-3280-0099
Tokyo Photographic Art Museum Yebisu Garden Place, 1-13-3 Mita, Meguro-ku, Tokyo 153-0062 Tel.03-3280-0099

www.yebizo.com

東京都写真美術館
TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM

YEBIZO MEETS



恵比寿から発信、 アートで発信

第10回恵比寿映像祭期間中、東京都写真美術館の1Fスタジオが、ゆったりサロン、トーク、イベントのフェスティバル・サロンになります。

TOP MUSEUM

YEBIZO MEETS

東京・恵比寿から発信、アートで発信しています

恵比寿映像祭地域発信プロジェクト「YEBIZO MEETS」は、昨年から開催された、東京・恵比寿という地域からアートを通じて発信するプログラムの総称です。

第10回恵比寿映像祭は、記念すべきアニバーサリーの年。より一層地域と繋がり、緩やかに「東京・恵比寿」から発信していく——。そんな視点で今年の「YEBIZO MEETS」は、場所を東京都写真美術館1Fスタジオへ移し、開催いたします。フェスティバル観覧の途中にぜひお立ち寄りください。

写真美術館1Fスタジオが 恵比寿映像祭の会期中、映像祭10周年の フェスティバル・サロンになります

恵比寿映像祭メイン会場である東京都写真美術館の1Fスタジオが、フェスティバル・サロンになります。会場めぐりの計画や、鑑賞後の休憩や待ち合わせに、寛いだ雰囲気的空間をご利用いただけます。またフェスティバル情報はもちろん、地域連携プログラムの情報についても発信するスポットとなります。そのほか、トークセッションやイベントも行われます。スタンプラリーのスタンプポイントにもなっていますので、ぜひお立ち寄りください。

会場：東京都写真美術館1Fスタジオ
日時：平成30年2月9日(金)～2月25日(日) (13日火曜・19日月曜休)
時間：10:00～20:00 (※最終日は18:00まで)



YEBIZO MEETS I 特別セッション： 東京から発信する映画・映像祭の「今」

2.14 Wed.



市山 尚三

東京フィルメックス/プログラム・ディレクター



荒木 啓子

PPF/ぴあフィルムフェスティバル/ディレクター



東野 正剛

ショートショート フィルムフェスティバル & アジア/
フェスティバル・ディレクター

恵比寿映像祭は、恵比寿地域のパートナーと連携しながら、国際フェスティバルとして、映像文化を発信して10年を迎えます。長きにわたり、東京から映画・映像文化の発信をおこなってきた3つの映画祭をお迎えして、東京から世界に発信する今日的意義とその継続性について、それぞれの映画祭の目線から語っていただきます。さまざまな実践のなかから見えてくる課題から、今後の映像・映画文化の可能性を語り合う貴重な機会となります。ぜひご期待ください。

モデレーター：田坂博子
(恵比寿映像祭ディレクター)

市山尚三 [ICHIYAMA Shozo]
東京フィルメックス
プログラム・ディレクター [東京]

1963年、山口県に生まれる。東京大学経済学部を卒業後、1987年に松竹株式会社に入社。竹中直人監督作品「無能の人」(1991)、ホウ・シャオシェン監督作品「憂鬱な楽園」(1996)等をプロデュース。並行して1992年より1999年まで東京国際映画祭「アジア秀作映画週間」(後の「シネマ・リズム」)の作品選定を担当する。1998年、オックス北野に移籍し、サミラ・マフマルバフ監督、ジャンク・監督などアジアの若手監督の作品のプロデュースを開始。一方、2000年12月に国際映画祭「東京フィルメックス」を立ち上げ、現在に至るまでのプログラム・ディレクターを務めている。

荒木啓子 [ARAKI Keiko]
PPF/ぴあフィルムフェスティバル
ディレクター [東京]

1990年PPFに参加。1992年PPF初の総合ディレクターに就任。以来、PPFアワード入選作品やPPFスカラシップ作品を中心に、日本の「自主映画」文化を国内外に紹介する活動を続けている。近年では、ベルリン国際映画祭+香港国際映画祭と共に企画制作した、日本の8mmフィルム作品をデジタル化し世界巡回する「8mmマッドネスHachimiri Madness」プログラムが大きな話題を呼んだ。

東野正剛 [TONO Seigo]
ショートショート フィルム
フェスティバル & アジア/
フェスティバル・ディレクター [東京]

1968年生まれ。カリフォルニア州ベッパーダインでジャーナリズムを専攻。卒業後、渡仏。3年間をクレルモンフェラン市に滞在する。以後、ロサンゼルスでショートフィルムの制作、ハリウッド映画の制作に携わる。2000年からは、毎年6月に原宿表参道で開催される「ショートショートフィルムフェスティバル&アジア」の事務局長として参加。現在は、同映画祭のフェスティバル・ディレクター。

会場：東京都写真美術館1Fスタジオ
日時：平成30年2月14日(水)
18時00分～20時00分
定員：60席(別途、エリア内での立見可)
入場：無料

YEBIZO MEETS II 地域発信トーク：NPO法人アーツイニシアティヴトウキョウ 視覚の果て：アーティストが見えない世界をどう描いてきたか

2.15 Thu.

2001年から代官山で活動を始めたNPO法人アーツイニシアティヴトウキョウ。通称AIT(エイト)は、アートや教育の場、また恵比寿映像祭・地域連携プログラムでもお馴染みです。彼らは、現代アートの複雑さや多様さ、驚きや楽しみを伝え、それらの背景にある文化について話し合う場を創り出しています。今回は、AITが毎年開講する現代アートの学校MADのプログラム・ディレクターを迎え、第10回恵比寿映像祭のテーマを読み解くトークを開催していただきます。



ロジャー・マクドナルド
[Roger McDonald]
MAD(Maiking Art Different)
プログラム・ディレクター/AIT 副ディレクター
[東京・代官山]

東京生まれ。イギリスで教育を受ける。学士では、国際政治学、修士では、神学宗教学(神やサイケデリック文化研究)、博士号では、『アウトサイダー・アート』(1972年)の執筆者ロジャー・カーディナルに師事し美術史を学ぶ。1998年より、インディペンデント・キュレーターとして活動。「横浜トリエンナーレ2001」アシスタント・キュレーター、第一回「シンガポール・ビエンナーレ 2006」キュレーターを務める。2003年より国内外の美術大学にて非常勤講師として教鞭をとる。長野県佐久市に移住後、2013年に実験的なハウスミュージアム「フェンバーガーハウス」をオープン、館長を務める。AIT設立メンバーの一人。

視覚の果て： アーティストが見えない世界をどう描いてきたか ロジャー・マクドナルド

写真や映像技術が生まれる遙か昔。私たちの祖先はその想像力を深い洞窟内に描いていました。同じように今日のアーティストたちも人間の目では見えないものを捉え、作品を生み出しています。宗教的、精神的、超越的なものとして語られていた感情や体験を、アーティストたちはどのようにして表現してきたのでしょうか？

「視覚の果て：アーティストが見えない世界をどう描いてきたか」では、第10回恵比寿映像祭のテーマである“インヴィジブル(見えないもの)”を読み解くとともに、ユニークな視点でアートの歴史を見ていきます。

会場：東京都写真美術館1Fスタジオ
日時：平成30年2月15日(木)
18時00分～19時30分
定員：60席(別途、エリア内での立見可)
入場：無料

YEBIZO MEETS III リンクセッション：次世代型グラスルーツアートプロジェクトを検証 ——オルタナティヴ・スペースstatements/アサクサの事例から

2.21 Wed.

兼平彦太郎

キュレーター



大坂紘一郎

アサクサ代表

次世代型グラスルーツアートプロジェクトを検証 ——オルタナティヴ・スペースstatements/アサクサの事例から

昨今の表現活動の発表機会は、オルタナティヴ・スペースや、アート・コレクティブの自主運営による場、あるいは特定の空間に依拠しないプロジェクト・ベースの活動など、多様な展開と広がりを見せています。第9回恵比寿映像祭地域連携プログラムに参加した「statements」は、期間限定の活動ながらボール・シャリッツやジェイ・チュン&キュウ・タケキ・マエダらのプロジェクトといった企画を次々と実現しました。キュレーターの兼平彦太郎氏が、自身が関わった実践例とともにグラスルーツ型の次世代アートシーンを俯瞰し、検証します。またそのケーススタディの一つとして、ボリス・グロイス招聘プロジェクトの実行委員やアントン・ヴィドクールの映画撮影プロジェクトなどを意欲的に実践している「アサクサ」より大坂紘一郎氏の活動について、ともに紐解きます。



大坂紘一郎 [OSAKA Koichiro]
アサクサ代表 [東京]

兼平彦太郎 [KANEHIRA Hikotaro]
キュレーター [東京・恵比寿]

近年の主な企画に「ジェイ・チュン&キュウ・タケキ・マエダ」(statements,東京|2017)、「トレッドソフ・ウィア・マウンテン・スクール 2016」(statements,東京|2016)「集合多武とアン・イーストマン企画展」、「アーティスト・イン・レジデンス 須崎：現代地方演劇3&4」(高知県須崎市|2015&2016)、「寛木経雄 左眼ノ恋」(三菱アートティアム、福岡|2014 *衆生ととの共同企画)など、そのほか郵便物やウェブサイトを展覧会と並列にプレゼンテーションする「ミヤギフシ American Boyfriend」プロジェクト(2013 - 継続中)や、アーティストブック「THE ABC BOOK by Shimon Minamikawa」(2010)の発行など、アーティストの展覧会以外のフレーム、プラットフォームによる企画も手がける。

会場：東京都写真美術館1Fスタジオ
日時：平成30年2月21日(水)
18時30分～20時00分
定員：60席(別途、エリア内での立見可)
入場：無料

早稲田大学中退、ロンドン芸術大学セントラルセントマーチンズ、キュレーション学科卒業。ロンドンの大和日英基金にて、政治・経済・文化における二国間交流の現場に携わった後、2013年に帰国しスカイザバスハウスに勤務する。2015年、30平方メートルの一般住宅を改装した現代アートのスペース「アサクサ」を設立。美術研究とマーケットの動向を媒介した共同キュレーションを核とし、これまでに日シュア・オコシ、オノ・ヨーコ、トマス・ヘルシュホルンらの展覧会を開催する。倉敷芸術科学大学および岡山大学 非常勤講師。